

# 豊南小学校・校長室だより

平成 30 年(2018 年)6 月 1 日  
発行者 西山 博章

児童数配布

第 5 号  
(通算 145 号)

## 6 月になり、来週は後半から「梅雨」入りするかも…

### と、天気予報でお天気キャスターの方が話していました。ヨ。…

今日は、久しぶりに晴れ間ができました。雨が続くと何となく心もすっきりとしません。子どもたちにとっては、朝、登校してからの時間や、20 分休憩、昼休みに運動場で精一杯身体を動かして「遊ぶ」ことができないのが「何よりも」ストレスがたまる原因になります。

先日も、すでに結構な雨が降って、運動場に水がたまりはじめているにもかかわらず、2 時間目が終わるや否や何人かの子どもたちが職員室に来て、教頭先生、生活指導の川野先生に「先生、今日は運動場で遊ばませんか!？」と懇願するように聞いてきていました。運動場に目をやると、もう誰が見てもそこで「遊べる」ような状態ではなくなっていました。にもかかわらず、子どもたちはだめとわかっていても何とか外で「遊びたい!」という、すがるような気持ちで先生に質問したのでしょう。しかし、答えは分かっていたものの、「雨で運動場は使えないね。」という言葉聞いて、ため息まじりで教室に戻っていく後姿に寂しさを感じました。

「梅雨」という言葉で私たちは「雨が続き」「しめじめとした」「洗濯物も乾きにくい」等々といったことを連想します。これは逆に言うと「雨続き」「じめじめ」「洗濯物が乾かない」といったことから、「梅雨」という季節を感じていることになります。

地球にはたくさんの国があります。赤道の真上の国もあれば、北極や南極に近い国もあります。当然、それぞれの国で起こる自然現象も違います。

日本には日本特有の自然があります。その一つが、1 年間の中に 4 つの季節(四季)があるということです。春の桜、梅雨の雨、アジサイの花、セミの鳴き声ではじまる真夏、ふと気付くと夏や冬では感じられないような「心地良い」風を肌で感じる秋、また、身体の心から冷えて手がかじかむような寒さが続く冬。…『季節を感じる』という言葉がありますが、毎日を忙しく過ごしていると、特に都会では、毎日がバタバタと過ぎ去っていき、朝起きてから気がつけば夜になり、また次の一日が始まる。…といったことが繰り返されていきます。

「忙しいから」こそ、時には普段の生活の中で一日中とは言いませんが、ふと立ち止まって、身の回りの「自然」が発している「言葉に」目を向けたり、耳を傾けたりすることで、何か自分が忘れていた感覚や、それまで悩んだり、滞っていたことが、ふっと開けて見えてくることもあると思います。

以前何度か書いたことがあります。私は毎日、朝 4 時には起きます。それは、うちにいる何頭かの犬を連れて朝のトイレを兼ねた 1 回目の散歩に(もちろん昨年学校に来てくれていたレイ君もいっしょです)いくためです。真夏では 4 時でもかなり明るくなっているのですが、今はまだ暗いです。しかし、4 時から 4 時半に向かうとあたりは次第に白みはじめ、今まで見えていなかった森の中の様子や空の色が見えてきます。

景色だけでなく、この春先には早朝の暗闇に包まれた森の中で普段めったに聞くことのないような「生物の鳴き声が」聞えてきます。たとえて表現するのは難しいのですが「ほうー、ほうー」という、はじめてきくと何かの鳥の鳴き声かとも思える声で鳴くのです。実は、シカが鳴いているのです。春先はシカの繁殖期でもあり、求愛行動のひとつでこういった鳴き声をだします。その姿は、暗い森の中で見ることはできませんが、確実にその暗闇の中にシカがいるのです。

また、空が白み始めると、今まで静けさに包まれていた森から、多くの鳥の鳴き声が聞えてきます。この季節は「うぐいす」がまず鳴き始めます。「ほーほけきよ」と聞えますが、うぐいすも最初から上手に鳴くことはできません。「ほー」だけで終わってしまうものいたりするのですが、何度も「練習?」していく中で、最後にはきれいに鳴くことができるようになるのです。うぐいすだけではありません。私は鳥は専門ではないのでよく知りませんが、都会ではみないような野鳥がつぎつぎと飛びはじめ、鳴き声を披露してくれます。

これ以外に、野生のイノシシが餌を求めて森からでてきて木々の根元を掘って、根っこを食べている姿を見ることがあります。こういった、様々な生き物が同じ森の中で「共存」している姿を目の当たりにすると、私たち人間も大きな自然の中では、こういった生物のひとつだということを改めて感じさせられます。

6 月の中旬になると、5 年生が林間学舎で和歌山県へ、6 年生が修学旅行で広島県へ行きますが、そこで、こういった普段は気がつかない、或いは経験したことのないような「自然」を身体で、心で「感じて」欲しいと思っています。それを感じることで、今までの自分たちから、一段成長した姿を見せてくれることを期待しています!

To be continued (次号に続きます)

